四　鉄道駅名のかな書きのしかたについて

（昭和23・10・24　運輸省、建設省地理調査部、文部省打合せ）

鉄道の駅名を「現代かなづかい」によって仮名書きにする場合の原則を定め、四つ仮名その他の書き分けについて実例を示して解説したもの。

一　鉄道の駅名をかな書きにする場合は、現代かなづかいによる。

二　現代かなづかいは、地名であることによって特に発音符号的な適用のしかたをせず、一般のことばを書き表わす場合と同様、ことばとして意味があると思われるものは、同音の連呼、二語の連合の場合と認めて「ち」「つ」の濁点を用いる。その場合、ことばとしての意味の一つのよりどころとしては、漢字の表記を尊重する。（意味のある訓読みの字に対応しては、それぞれの字のふりがなのように用いる。）

ことばとしての意味の希薄なものや、漢字によってその語源をたどることのできないものは、「し」「す」の濁点とする。

三　オ列の長音の「ふ」「ほ」「を」の類を「お」「う（オの長音）」などのいずれにするかはその発音によるとともに、ことばとしての意味があるかないかにより、そのよりどころとしては、漢字の表記を尊重する。特に意味のある訓読みの字に対しては、それぞれの字のふりがなのように用いる。

用　例

(一)　「じ」「ず」「ぢ」「づ」のかなづかいについて

1　現代かなづかいの通則にしたがって「じ」「ず」とするもの。

出　雲　いづも　→いずも
宍　道　しんぢ　→しんじ
逗　子　づし　→ずし
安治川口　あぢかはぐち→あじかわぐち
多治見　たぢみ　→たじみ
敷　地　しきぢ　→しきじ
久　地　くぢ　→くじ
下　路　しもぢ　→しもじ

2　特に音訓表において「じ」「ず」の音または訓を認めているもの。

梅小路　うめこうぢ　↓うめこうじ
西大路　にしおほぢ　↓にしおおじ
川　路　かわぢ　↓かわじ
千　路　ちぢ　↓ちじ
伊　豆　いづ　↓いず
智　頭　ちづ　↓ちず

3　二語の連合の意識があると認めて「ぢ」「づ」を使用するもの。

小　机　こづくゑ　↓こづくえ
小　月　をづき　↓おづき
三日月　みかづき　↓みかづき
穂　積　ほづみ　↓ほづみ

4　一方の語の意味がはっきりしているので、二語の連合の意識があると認めて「ぢ」「づ」を使用するもの。
（ふりがなのように用いる類である。）

江釣子　えづりこ　↓えづりこ
日　詰　ひづめ　↓ひづめ
飯　詰　いひづめ　↓いいづめ
上　月　かうづき　↓こうづき
上　妻　かうづま　↓こうづま
瓜　連　うりづら　↓うりづら
安　土　あづち　↓あづち
真　鶴　まなづる　↓まなづる
都　築　つづき　↓つづき

津も、意味があると認め、かつ、ふりがなの意識があると考えて「づ」とする。

国府津　こふづ　↓こうづ
杉　津　すいづ　↓すいづ
郷　津　がうづ　↓ごうづ
焼　津　やいづ　↓やいづ
保津峡　ほづけふ　↓ほづきょう
保津川　ほづがは　↓ほづがわ
志津美　しづみ　↓しづみ

5　同音の連呼を認めるもの。

綴　つづら　↓つづら
葛川口　つづらがはぐち↓つづらがわぐち

6　漢字からは、ことばとしての意味がはっきりしないので、「じ」「ず」にするもの。

上　野　かうづけ　↓こうずけ
下　野　しもづけ　↓しもずけ
上　枝　ほづえ　↓ほずえ
小鳥谷　こづや　↓こずや

7　ことばとしての意味が希薄であって、漢字は万葉がなのように音を表わすだけに用いられているもの。

阿知須　あぢす　↓あじす（音訓表では、知に「じ」の音は認めていない）

(二)　オ列の長音等について

1　歴史的なかなづかいで「ほ」「を」と書くもので「お」になるもの。

大川原　おほがはら　↓おおがわら
郡山　こほりやま　↓こおりやま
桑折　くをり　↓こおり

2　歴史的かなづかいで「ふ」「ほ」と書くもので、もとのままのもの。

武生　たけふ　↓たけふ
粟生津　あはふづ　↓あわふづ
赤穂　あかほ　↓あかほ

3　歴史的かなづかいで「ふ」と書くもので、「う」となるもの。（「ふ」が長音にならないで「う」になるもの。）

萩生　はぎふ　↓はぎう

4　歴史的かなづかいで「ふ」と書くもので、オの長音となるもの。

石生　いさふ　↓いそう
松任　まつたふ　↓まつとう
能生　のふ　↓のう
麻生　あさふ　↓あそう
祝園　はふその　↓ほうその
加納　かなふ　↓かのう
和納　わなふ　↓わのう

5　歴史的かなづかいで「ふ」と書くもので、ウ、オの長音になるもの。

藤生　ふじふ　↓ふじゅう
桐生　きりふ　↓きりゅう
壬生川　にふがは　↓にゅうがわ
下名生　しものめふ　↓しものみょう

6　歴史的かなづかいで「を」と書くもので、オの長音になるもの。

青梅　あをめ　↓おうめ
真岡　まをか　↓もうか